
二重人格

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二重人格

【Nコード】

N7637H

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

親を殺した香蓮^{かれん}。香蓮はいきなり目の前が暗闇と化した。何故、もう一人の自分が親を殺したのか？……

二重人格1（前書き）

これは、ヒクションなので、深く考えないでください。

二重人格 1

あなたは自分を殺したくなるほど憎んだことをありますか？

・
・
・
・

ある朝のこと、私は目が覚めた。

起きたとき目の前にある光景が血の海だった。

さあ、あなたならどうしますか？

私は警察に連絡を取ろうか迷いました。

血だらけの手の平からカランと軽い音がした。

その音を出したものは家庭用の普通の包丁だった。

いつも、母と仲良く作っていた晩ご飯。

それなのに、どうして私が殺しているの？

私が殺したの？

いつも楽しかったのに。

何で？

頬には無数の雫。

そう考えていたとき。

バンツ！！！！！！

いきなり玄関の扉が開いたのがわかった。

ドタドタと音を立てながら入ってきたのは警察の人達だった。

「取り押さえるー！！！！」

警察の中の偉い人なのか、その人がそう掛け声をすると、その人以外の人が私のことを取り押さえてきた。

私はそのとき意識が飛んだ。

「いてーよ！！！！てめえら、そんなことしなくてもこいつはちゃんと歩くっつーの！！！！」

私の意識がないときにそういつぶうな声が薄っすら聞こえた。

「……………」

その声がしなくなったときに私は意識が戻った。

私は何も言わずその人達についていった。

抵抗したって無駄かもしれない。

私は頬に涙を流しながらついていった。

「長官？どくなさったのですか？不満そうな顔をして。」
部下がそう尋ねてきた。

その言葉に若い、長官という人は。

「いや、気になることがあってな。」

その長官はそうつぶやいた。

・
・
・
・

「どうして、両親を殺したんだ？？」

怖い顔をした人がそう私に尋ねてきた。

私はその迫力を出している人に尋ね返した。

「私は両親を殺したんですか？」

私は頬から一粒雫を落とした。

私が聞きたい。

私が両親を殺したのか。

何故両親を殺したのか。

何でそのときの記憶がないのか。

「お前、覚えていないのか？」

その男の人が驚いた顔で尋ねてきた。

私はその男の人の目を見て冷静に尋ねた。

「覚えていないんです。何故私は両親を殺したんでしょうか？」

溢れ出す涙。

何度も拭った目の周りは赤くなっているに違いない。

「長官。これは……」

その男の人は若い男の人に言葉を言いかけた。

「ああ、二重人格だろう。」

若い男の人は下をうつむきながら言い放った。

二重人格という言葉はきいたことがある。

一人の体に二つの人格（性格）ができること。

私はその一人なの？

そんな今まではそんなことはなかったはずなのに。

「長官、この件は降りたほうがよろしいのでは？」

怖い顔の男の人が若い男の人に心配そうに尋ねた。

え？

なんだろう？この空気。

「いや、大丈夫だ。俺がこの件を処理する。」

若い人はそう一言言い残して、どこかへ行ってしまった。

若い人は黒髪で目に入りそうなくらい長い前髪に鋭く光る瞳。

きりつとした輪郭。

少し高い鼻筋。

綺麗な顔をしている。

何か寂しそうな顔をしていた。

二重人格という言葉がすぐ出てきたといっことは前にもいっつ
事件があつたのだろうか？

きっと何か思い出があるのだろう。

今の私には別に考えなくてもいいことだ。

「では、君は表の人格だね。」

また怖い人が私に向かってそう言ってきた。

私は小さな声で「多分。」と言いながら頷いた。

「色々大変になりそうだ。」

ため息を吐きながらつぶやいたその言葉は、私に重く押し掛かった。

・
・
・
・
・

初めて入る牢屋というところは寒かった。

床はコンクリートで冷たくて。

壁にはところどころ隙間風が入ってくるところがある。

私は硬いベットに寝転んだ。

コンクリートの天井少し黒くてほこりっぽかった。

近くから大きな声が聞こえたりすごい物音がしたりした。

「ここから出せー！！！！」「何で俺がこんなめにあうんだよー！！」と色々。

物音もすごかった。

でも、私はそんな気にはしなかった。

そんなことしたってここから出られるわけじゃない。

私は家に帰っても一人だからまだ、ここのほうがいいのかも。

少し慣れてきてそう思えるようになってきた。

私にはもう一つの人格があるの？

そのときだった。

「おい。」

いきなり柵の前で私を呼んだのはあの若い男の人だった。

私はその呼ばれたほうに目を向けた。

「自己紹介する。俺は嘆崎たんざき 賢治けんじだ。よろしく頼む。お前はなんと
いう名前だ？」

いきなりそういわれたので驚きながら…

「夕月ゆづき 香蓮かれん。」

私はボソツと言った。

あまり大きい声は出せなかったが、ちゃんときこえたと思う。

「そうか。お前は殺したときのことを覚えていないんだな？」

嘆崎さんは私にそう尋ねてきた。

私は応えようとしたときいきなりまた意識が遠くなった。

「いいや。覚えてるよ?」

私が意識が遠くなってる間にそのような声が聞こえた。

ああ、やっぱりもう一人の私がいるんだ。

「お前何がしたいんだ?裏の人格さん?」

嘆崎という男はそう俺に言ってきた。

裏の人格。

確かに俺はそうなるのかもな。

いつもいつも俺は悪いことばっか。

「俺はこいつを陥れる。こいつに接した人間はすべて排除してやる。それが俺の夢。」

俺はそう言って笑った。

きつとこれでいい。

私は意識が戻った。

「私はやっぱり二つの人格があるんですね。意識が遠くて何を言ってるかあまり聞こえなかったけど。何をもう一人は言ったんですか

「？」

私は嘆崎さんに尋ねた。

嘆崎さんは唇をかみ締めていた。

「嘆崎さん？」

私は心配しながら嘆崎さんの顔を覗き込んだ。

「君に接した人を全員殺すのが夢だそうだ。」

その言葉を聞いた途端に吐き気がした。

体が震える。

「私は何かうらまれることをしたでしょうか？ どうして、裏の人格はそこまでして私を憎むんでしょうか？」

私はゆっくりと冷たいコンクリートの上に体を丸めて座った。

どうして、自分に裏の人格ができているのか。

私にはわからない。

でも、裏の人格と話せないのだ。

どうやったら殺した訳を聞けるのだろうか？

「わからない。でも、頑張って探してみるよ。裏の君の本当の気持

ちを。それじゃ、またくるからな。」

嘆崎さんは私の背中にそう言い残して行ってしまった。

薄暗い牢屋の中は一人の寂しさが冷たかった。

きつといつまでも、こんなところにいたら自分が自分でいられなくなるような気がする。

お母さん、お父さん、ごめんね。

「どうしてお前はそんなお人よしなんだよ。」

耳の鼓膜のもっと奥のほうからこの声が聞こえた。

私の声とよく似ている。

「あなたはもう一人の私なのね？」

私はもう一人の自分に問いかけた。

「そうだよ。俺はあんたが大っ嫌い。だから、両親も殺してやった。」

もう一人の自分はそう言った。

何か悲しそうな声をしていた。

私にはわかったような気がする。

「じゃあ、私を殺せばよかったじゃない！！！！親を殺して何になるのよ！！！！どうして、私を一人にさせたのよ。」

私は泣きながらそう叫んだ。

私がいなくなればよかった。

犠牲は私だけでよかった。

「そしたらが俺がいなくなるじゃねーか。」

私はその言葉が耳に残ったとき思いついた。

私がいなくなればこの事件は終わるじゃない。

みんな苦しまないで終わる。

なら、私がこの事件をとめなきや！！！！

私はそう思いつき何かないと探した。

目についたのは水道だった。

洗面台に水をためて息をできなくしたらきつと…

私は洗面台の前に立ち、水道の蛇口をひねった。

そのときだった。

意識が急に飛んだ。

「バカな奴だな。無駄なことをしゃがって。」

キュツ

蛇口を閉めたのはもう一人の自分だった。

私は気づいたら変な異空間にいた。

「ここは…」

私は全部濃い紫色をした空間に立っていた。

そして、真正面にもう一人の自分が立っていた。

「ここは俺がいつもいる場所。わかんないだろ？いつも外をみているもんな？」

もう一人の自分は無愛想にそう言った。

でも、やっぱりどこかに寂しそうで、悲しそうで、切ない何かがあるんだ。

「あなたは どうして、私をそんなに苦しめたいの？」

私はゆっくりと尋ねた。

本当の気持ちを知りたい。

きつと人殺しつひらなんてしたくないはず。

そう信じたい。

私はそう思っていた。

「あんたにはわかんない。」

もう一人の自分がそう言ったとき、いきなり現実に戻された。

え？

でも、もしかしたらこれで話せるようになったかも。

何を考えて私以外を殺しているんだろう？

私はそう思った。

・
・
・
・

「今日は外に行こう？」

いきなり嘆崎さんが私に声をかけてきた。

私は目を丸くした。

「でも、そしたら、もう一人の……」

私がそう言いかけたとき。

「大丈夫。さあ、いくぞ……！」

嘆崎さんはそう言うなり牢屋の鍵を開けて、私の腕を掴んで連れて行った。

え???

ちよつとー!!!

・
・
・
・
・

きつと知らなかった。

人がこんなふうに傷つけあうなんて。

人がこんなふうに傷つくなんて。

誰も知らない気持ちはどこへ消えていくのだろうか？

・
・
・
・
・

次に続く…

二重人格2

「さ、ついた。」

嘆崎さんはそう言って力強く掴んでいた私の腕を離した。

目の前に広がる鮮やかな風景はきつと忘れることのない色をして
いた。

いつになっても、きつと色あせないだろう。

なんて綺麗なんだろう。

私はボーっとその鮮やかに咲き誇る花畑を眺めた。

さっきまで暗いところにいたからだろうか。

それとも…

いつの間にか頬には小さな雫が流れていた。

人を殺した罪悪感が心に重く押し掛かる。

私はなんて悲しいんだろう。

「綺麗だろ？ここは俺のお気に入りだね。」

嘆崎さんは初めて微笑んでくれた。

何故かその微笑みは心の底まで染みていった。

温かくて、綺麗で、愛しく思った。

「ここには何か思い出があるんですか？」

私は綺麗な横顔に尋ねた。

本当は「二重人格に」と言いたかったが、そんなことはまだ言えない。

「ああ、まあね。昔の女のことだね。」

その言葉を聞いたとき何かが私の胸を締め付けた。

なんだろう？

この気持ち。

「昔の彼女…。」

私は小さくつぶやいた。

本当は詳しく聞きたい。

でも、聞いたらどこか遠くに行ってしまういそうな恐怖感が私を襲う。

何故だろう？

そのときだった。

いきなり意識が飛んだ。

何でこんなときにもう一人の自分が出てくるの？

「お前みたいな奴に彼女なんていたんだ。」

いきなり裏の私が出てきた。

私はもう一人の自分がいつもいるという異空間に立っていた。

相変わらず薄暗いな…。

それに静かなんだな。

「いきなり裏のお前が出てきたらすぐにわかる口調をしてるよな。お前って。」

嘆崎さんは呆れてため息をついた。

そんなの一番自分がわかってる。

「うるせーよ。それより、お前に彼女がいたなんてなー気持ち悪。」

俺は嘆崎という男に笑って見せた。

嘆崎という男は拳を握り締めた。

「お前が女じゃなければ殴ってたのにな。」

嘆崎という男は鋭い瞳をして、俺に向けてきた。

怖いと思ったのはこれで二回目。

親を殺したときと。

もう一つは…。

「殴ればいい。傷つけければいい。こんな体俺には必要ないんだから。こいつがいなければ俺が生活できたんだ。いつも中から全部見てた。」

俺は胸に手を当てた。

そして、服を握り締めた。

「殴っても、傷つけても、その体はなくならない。お前がいなくなるらないかぎり。お前が表の自分とまっすぐに向き合ったとき。そのときはきつと何もかもが決まるとき。」

その嘆崎という男はまっすぐ俺を見つめて言った。

は？

こいつムカつく。

何もかも上目線で言いやがって。

「脅しのつもりか？」

俺は笑った。

「その意味がわからないんじゃない、お前は一生表の人格にはなれないぞ。きつと今の表の人格さんはわかると思っけどな？」

嘆崎という男は鼻で軽く笑った。

俺は腹の底から怒りが湧いてきた。

こいつー。

俺は拳に力を込めた。

「殺してやる。」

俺は一言そう言って大きめの石を持って思いっきり投げた。

その勢いよく投げた石は軽くかわされた。

「甘く見んなよ。」

嘆崎という男は俺のことを睨んだ。

俺は異空間に戻った。

「え？お、わ！！」

私の体は意識がないので一気に力が抜けて倒れかけた。

「つぶねー。」

嘆崎さんは私の体を支えてくれた。

私はゆっくり目を開いた。

一人で静かな異空間の中にも何も楽しくなかった。

毎日あそこにいるもう一人の自分はどんな思いであそこにずっと留まっていたんだろう？

きつと寂しかったに違いない。

私の頬には気づいたときには涙がそつと流れていた。

今にももう一人の自分の声何かを訴えてきそうでもとても苦しくなった。

寂しいよ。悲しいよ。苦しいよ。と、そつ耳に飛び込んできそう
で。

フワッ

私を包み込んだ温かいものはとても優しく感じた。

「嘆崎さん？」

私は震える声で呼んだ。

優しくて、ちよつと不器用な手は大きくて温かい。

体全体に感じる人の温度。

なんてあたたかいのだろうか？

「今だけでいいから、だから、このままでいさせてくれ。」

嘆崎さんの声は何故か震えていて、何かに怯えているようだった。

声から伝わる寂しさと怖さがとても切なくて。

「今だけですよ。」

私は涙ぐんだ瞳を閉しながら嘆崎さんの背中に手を回した。

ああ、もうすぐ春だ。

・
・
・
・
・

私は牢屋というものに結構慣れてきたときだった。

ある男が脱走したのだ。

警察中は大パニック。

そして、その男は私や他の牢屋に入っていた人達の牢屋の鍵を開けたのだ。

そして、私はあの異空間に引きずり込まれた。

「やっと俺の出番だ。」

もう一人の自分がそう言って体を則った。

ダメ。ダメ。ダメ。

何回もその言葉を言い放った。

何回も表に戻ろうと思った。

でも、周りが暗くて静かで、すごく不安の気持ちでいっぱいになった。

怖い。

寂しい。

苦しい。

明るさを取り戻してきていた心はその暗闇に蝕まれていく。

私はうずくまった。

頬には涙が溢れ、息がまともにできない。

そして、大きいスクリーンのような画面らしきものが出てきた。

そのよくわからないものに映し出されたのは怯える人達の顔だった。

「何をする気??」

私は後ずさりをしながらつぶやいた。

それがもう一人に聞こえたらしく、めずらしく応えた。

「お前に関わったすべての人を殺す。」

私は体中が震えだした。

震える拳をギュツと握り締めた。

震える足を無理矢理立たせた。

震える体を必死に抑えた。

「そんなこと、絶対あんたにさせない。」

このときに私は表に戻った。

このときは穏和な性格の私が変わった唯一のときだった。

立っていた場所は学校だった。

友達がいつぱいいて、私のことを怯えながら見つめていた。

ここにもう戻ることは許されない。

だったら、私のできることは。

私はそのときに考え付いた。

もっと早くにそうしてればよかったんだ。

私は後悔しながら持っていた包丁を落として駆け出した。

早く、早く、もっと早く。

もう一人の自分が表に出ないうちに。

・
・
・
・
・

息が切れるまで走った。

学校の屋上に上った。

「やめろ!!!!!!!!!!」

耳の奥深くでもう一人の声がそう叫んでいる。

鼓膜に響く音。

体全体を包むまだ肌寒い春の風。

人生の中で何回泣いただろう？

何回笑っただろう？

いろんなことを考えた。

でも、ここで最後。

風の音が耳を触る。

大きく広がる建物の光と薄暗くなっている空はとても綺麗だった。

「さよなら。」

そうつぶやいて、私は足を屋上の小さい塀にのせた。

その時だった。

バンッ

ものすごい音がした。

「やめろ!!!」

息を荒くして、すごい苦しそうな顔をして、私に駆け寄ってきた。

私は少し体を引いた。

その時だった。

私は小さい塀にもう片方の足を突っかけた。

私は目を疑った。

どンドン後ろに引っ張られる感覚がした。

死ぬという動作が後悔に変わった。

私はここで死ぬんだ。

私は目から涙を流し目をつぶろうとしたときだった。

目に飛び込んできた光景は驚きが隠せなかった。

私の頭と体を覆うようにして、嘆崎さんが私のことを抱きしめて
いる。

「何で!!!!!!!!!!」

私はそう叫んだ。

いつも、求めているときにあなたは私の前に現れる。

何で？

「死んだらどうにかなる問題じゃない。」

ガンッ

嘆崎さんがそう言った瞬間すごく鈍い音がした。

私は顔を上げた。

どんどん広がっていく血が私の目の前に広がる。

私はそれを見た瞬間にあのときの光景が浮かんできた。

「俺は何をしているんだか。助かったんだな。」

嘆崎さんは頭をかきながらそうつぶやいた。

私はさっきの言葉が頭に残る。

「お前は先に戻ってる。」

いきなり隣に立っていた人に言われた。

私はしぶしぶ、戻ることにした。

隣に立っていた人と言葉を交わす嘆崎さんは笑っていた。

私は何回も頭を回るこの言葉に吸い込まれるような気がした。

栞。

もうここには。

そして、最初の取調室でのあの状況。

すべてがわかる。

私は私と見られてるんじゃない。

私は栞という人に重ねられているだけ。

いつの間にか頬を流れる涙。

あの優しい腕の中は私に与えてくれたんじゃない。

菜という人に重ねて抱きしめてくれただけなんだ。

「殺しちまえ。」

耳の奥でそう訴えているもう一人の自分の言葉が聞こえた。

私は怒った。

「そんなこと死んでもしない！！！！！！あんと私は違う！！！！！！！！！！」

私は心の中で怒鳴った。

きっとこの気持ちがあったのだろう、もう一人の自分が続けて言葉を吐いた。

「お前はあんな奴に恋を抱いてる。恋なんてつまんない感情は捨てちまえ。お前には俺にこの体を預けるといふ大きな使命がある。」

いきなりそう言われた私は心の中で怒鳴った。

拳を限界まで握り、爪が手の平に食い込むのがわかった。

「恋なんてしてない！！！！この体は私の体よ！！！！勝手にあなたこの体に生まれたんじゃない。あんたがいなければ、あんたがいなければ私はいつも平和だったのよ！！！！！！」

私がそう叫んだとき。

もう一人の声がしなくなった。

え？

何で黙ってるの？

何故か、一人の気配が無い。

嘘？

消えたの？

私は急に不安になった。

何かが崩れてる感触が体を蝕んでいく。

「おい。」

あまり知らない声が私の耳に響いた。

私は泣きながらその声がするほうに顔を向けた。

その人は不思議そうな顔をしながら用件を口にした。

「嘆崎長官からお前を病室につれて来いと的命令をうけた。ので、早くいくぞ。」

いきなり知らない警察の人の腕に引つ張られ私は今逢いたくない

人に逢うことになった。

薄暗くて狭い廊下をくねくねといろんな角度で周りながら病室についた。

こんなところ通ったことない廊下や部屋があったのでびっくりした。

こんなにいっぱい部屋があったんだ。

そして、よくこの人達は迷わないなと思った。

目の前には包帯を所々巻いている嘆崎さんを見ると胸が苦しくなった。

少し沈黙が私達の間流れた。

そして、その沈黙を破ったのは私だった。

「どうして、私を助けたんですか？」

私は拳を握りながら言った。

その光景を見てなのか嘆崎さんは冷たく言った。

「お前は どうして死のうとした？」

鋭い目が怖かった。

目をあわせることができなかった。

・
・
・
・

正直に話すよ。

あなたが求めていることはなんだってあげる。

だから、あなたのことを知りたい。

複雑な気持ちはどんどん私を蝕んでいく。

その感触は何かが崩れるのと似ている。

せつかく元気になれたのに。

せつかくあなたとの思い出ができたのに。

どうして、物事は私の手からすり抜けていくのだろう。

・
・
・
・

次に、続く…

二重人格3

「私はいなくなりました。私がいるせいで、みんなが苦しむなら私はいなくなりましたほうがいいと思っただ。私がいなくなることでも傷つかないし、みんなも傷つかないのなら、それでいいんだと思っただ。だから、あそこで死なせてくれればよかったですだ!!!」

私は泣き崩れた。

冷たい床に一つずつ雫が落ちる。

何回も言葉にしたかった言葉。

弱み、苦しみ、悲しみ。

すべてこの言葉に入っている。

気づいて欲しかった。

誰でもいいから聞いて欲しかった。

「罪を犯したものは償うのが人間なんだ。お前は両親を殺した重い罪がある。それを償うのがお前の使命なんじゃないのか？」

嘆崎さんは優しく言った。

そのときに浮かんで来た。

お母さんとお父さんの優しい笑顔が。

楽しかった日々が。

い。
どうして、もう一人の自分はあることをしたのかまだわからない。

男みたいな人が私の中にもう一人いる。

いつもいつも、悲しそうで冷たそうで苦しそう。

殺そうとしてるときの心の中は怒りじゃない。

すべてが違う何かだった。

「嘆崎さん。」

私は少し泣いて、やっとおさまってきたときに嘆崎さんと呼んだ。

「なんだ？」

そっけないけど、そこにも優しさがあったのがすぐにわかった。

「もう一人の私がないの。いつもあったもう一人の重みがないの。心配を感じれない。」

私はうつむきながら言った。

見えない心。

もう一人の恨み、妬み。

どこかに置き去りにされた感覚。

冷たくてまるで氷の欠片のよう。

「きっと、探してるんだ自分の居場所を。こっちにこい香蓮。」

初めて私の名前を呼んでくれた。

それが嬉しくて切なかった。

そんなときに頭の中を栞という言葉がよぎった。

そして、私は嘆崎さんの近くに行くため、立って歩き出した。

そのときだった。

私の意識が飛んだ。

よかった。

もう一人の自分がいた。

「あんたはどうして、こいつに構う。」

もう光がない黒い目には悲しみが映っていた。

「お前は裏のほうだな……。どうしてだろうな？」

嘆崎という男は俺の目から目を逸らしながら言った。

どこか遠い目をしている。

「勝手に昔の恋人と俺を重ねるな。俺とこいつは栞じゃない。」

俺がそう言つと嘆崎は驚いてこっちに目を向けた。

綺麗な黒い目には光が灯っていた。

俺と違つ。

悲しくなつた。

「お前には全部話さなきゃな。栞とい女は俺の大切な恋人だつた。時期は結婚を申し込もうとしていた女だ。だが、ある日だつた。あいつはお前みたいに親を殺した。そして、刑務所で死刑になつてしまった。そして、葬式のときに言われたんだ。栞は二重人格だつたそうだと。何も言えなかつた。苦しくて悔しくて寂しくてがむしやらに泣いたさ。でも、ある日栞の母親さんが栞が俺にとつて一通の手紙を渡してくれた。これだ。」

そう言つて俺にその手紙を渡してきた。

俺はその手紙を読んだ。

大事にしているのが新品同様に綺麗なことですぐにわかつた。

「私の大好きな賢治へ」

この手紙があなたのもとにあるってことはもう私はいないわね。

泣いてるんじゃないでしょうね？あなたには笑顔が一番だよ。今日はとても晴れていました。

あなたと一緒に散歩をしてくれたときはいつも晴れてたね。またあなたと行きたかったな。

でも、これで最後。

私は二重人格と知らされて、とっても誇らしげに思ってる。

私の中にはもう一人の性格の私がいるってすごくない？

でも、なんでかわからないの。

どうして、私をもう一人の私は何故私のことを怨んでるのか。

どうしていつも寂しそうなのか。

あなたはわかる？賢治。

賢治。

本当は怖いんだよ。

死刑。

私は何もしてないし、何も知らないのに、そんな判決はひどいと思っただ。

でも、殺したのは結局は私なのだから、認めなきゃいけないのよね。

賢治。

逢いたいよ。寂しいよ。悲しいよ。苦しいよ。

死にたくないよ。

いつか、また会おうね。

大好きだったよ。

賢治。

賢治のことが大好きな栞より」

どんな思いで、この手紙を書いたのかはわからない。

けど、何故か胸がきつく縛られた感じがした。

そして、嘆崎を見つめると頬を涙が伝わっていた。

大好きな人を失った悲しい気持ちは俺にはわからない。

けど、そのときに微かに切なくなつた。

嘆崎が愛しいと一瞬思つてしまった。

俺は我に振り返り首を振つた。

「あんたのこと一つ教えてもらったから、俺のことも教えてやるよ。」

俺は嘆崎に手紙を返して、座りながら言つた。

嘆崎は涙を拭いながら私のほうを見つめた。

「あいつが泣いてるときや、寂しいときや、苦しいとき。友達に省かれたり、親に甘えられないかつたり、悩みができたとき。全部苦しいものを俺が背負ってきた。いつも苦しいときだけ俺なんだ。そして、あいつは俺に全然気づいてくれなかった。助けてあげているのは俺なのに。支えているのは俺なのに。だから、そろそろ気づかせてやった。そしたら、あいつはいつも泣く。あいつには初めてのことかもしれない。あいつ泣きやすいんだよ。そのたびにしょっちゅう俺が表に出ては涙を拭つた。それをあいつは。」

俺は言葉を止めた。

初めてだった。

俺が自分で涙を流したのは。

「お前は寂しかったただけだろう？なあ、香蓮。」

その言葉がゆっくりと俺の心に溶け込んだ。

どどん流れてくる涙はとても、温かった。

泣ってこんなもんなんだ。

俺は初めて人が温かいと気づいた。

俺は香蓮であって、香蓮じゃない。

「俺の居場所はないんだな。」

「香蓮？」

嘆崎が俺の顔を覗き込んだ途端に。

パタン

香蓮が倒れた。

異空間の中…

「あれ？もう一人の私？」

私は首をかしげながら尋ねた。

もう一人の自分はいつもの寂しさがなかった。

いや、違う。

何かに絶望をしている顔。

「どうしたの？」

私は顔を覗き込むように尋ねた。

どんどん暗闇にもう一人の自分が消えていくのがわかった。

「え？」

どんどん消えていく。

私の周りにも暗闇が出てきた。

いつも暗い周りがもっと暗くなってきた。

「ダメ！！！！行っちゃダメ！！！！！！」

私はもう一人の自分の手を掴んだ。

「どうして、止める。俺がいなくなったほうがよかったんだろ？」

！！だから、消える。俺がいる場所なんてないんだよ！！！！」

もう一人の自分が泣きながら叫んだ。

いつもの強がりだったんだ。

きっと心を強くしないと自分が壊れるから、だから強がってたんだ。

どうして、もっと早く気づいてあげられなかったんだろう？

自分を支えてくれてたのは、この子だったんじゃない。

どうして、この子の存在に気づいてあげられなかったんだろう？

「ごめん。ごめんね。ごめん。」

私はもう一人の自分を力一杯抱きしめて何回もこの言葉をつぶやいた。

「何でお前が謝るんだよ。俺がお前の両親を殺したのに。」

もう一人は泣いたグシャグシャの顔で私にそう言った。

何故かその姿はとても切なくて。

ずっと寂しかったよ。

私にもう一人の自分がそう伝えているかのような気がした。

「お母さん達を殺したのは結局は私だもん。だから、連帯責任だよ。」

私は少し笑って言った。

「栞かよ。」

その一言で全部が吹き飛んだ気がした。

私は放心状態になった。

「?おい。どうしたんだよ。」

私はもう一人の言葉が聞こえなかった。

栞。

ああ、思い出したくなかった。

「あああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

私がそう叫んだとき。

暗闇が私を一気に包んだ。

「おい!!!!!!!!!!」

俺は必死に外から呼んだ。

異空間の中で真っ黒な暗闇が丸くもう一人の自分を包んでいる。

俺は急いで表に意識を出した。

「どうしよう！！！！もう一人の自分が…」

俺はパニック状態に陥った。

怖い。

また、一人になるような気がした。

もう、一人は嫌だ。

どうして、栞という言葉が発した途端に…

ああ、そっか。

俺ももう一人の自分もこいつが好きだったんだっけ。

「どうした？」

そんなことをお構いなしに嘆崎は俺に問いかけた。

嘆崎の心配をそんな顔はとても切なくなった。

嘆崎はただ、栞と自分達を重ねていると実感する。

心配そうな顔の瞳は綺麗な黒色をしていた。

深く濃く。

どんなものにも負けない何かを持っている。

「お前は今でも栞が好きか？」

俺は切ない顔をしながら聞いた。

今にも零れ落ちそうな涙を必死にこらえながら尋ねた。

嘆崎はその妙な光景を見て一回驚いたが、すぐ冷静になって言った。

「今でも好きだよ。」

当たり前のことだ。

そりゃ、結婚まで考えたかけがえのない人だったのだから。

当たり前だ。

当たり前のはずなのに。

気づいたら俺の頬には涙が流れていた。

もう一人の自分はきつともっと暗闇に体を預けるだろう。

俺は気づいた。

こんなに俺は弱かったんだと。

俺は涙を拭って立ち上がった。

そして思い足取りで牢屋に戻るうとした。

「何処へ行く？」

嘆崎は心配そうに私に聞いてきた。

俺は一步進もうとしている足を止めて振り返った。

「牢屋の中に戻ってる。」

俺は笑ってそう言った。

さあ、忘れよう。

封印しよう。

私の誰にも気づかれてない心を。

すべて、どこかへ置いていこう。

誰にも気づかれてはならないこの思いを。

そう思ったときだった。

クイツ

俺の服を誰かが引っ張った。

俺はそのほうを振り返った。

見つめた先には嘆崎が恥ずかしそうに顔を赤らめて服を挿んでいた。

「何？」

俺は鼓動を立てながら尋ねた。

トクン…トクン…トクン…

ゆっくりと流れる鼓動。

それは、自分でも隠すことができない恋の証拠だった。

「今日はここにいてくれ。」

嘆崎はそう言ってゆっくりと俺のことを引き寄せた。

俺は嘆崎の腕に引き寄せられた。

俺の手を優しく握った。

俺の手からきつと心臓の音が伝わってしまった。

嘆崎の手の平は少し冷たくてドキツとした。

寂しい。

手の平から伝わる寂しさは、きつと俺にしかわからない。

「寂しいのか？」

俺は嘆崎に無表情で尋ねた。

嘆崎は驚いた顔を一瞬見せた。

「よくわかったな。俺は小さい頃から一人だったからな。寂しさを
感じると人に甘える習性がある。これじゃあ、子供と一緒にだな。」

嘆崎は苦笑いしながらそう言った。

その苦笑いした嘆崎は俺の手を少し力を込めて握っってきた。

「朧にもそういうふうに甘えたのか？」

俺は自分が情けなくなった。

顔も知らない。声も知らない。

そんな相手に嫉妬している自分が情けなくてしょうがない。

「いや、あいつには甘えられなかったな。何か自分が守っていかな
きゃって思えばっかりで。朧に甘えたことは一回もなかったな。」

少しだけ、嬉しかった。

いや、すごく嬉しかった。

朧に見せていない性格を俺に見せてくれたことがすごく嬉しくな

った。

「……そっか。」

俺は笑った。

きっと心の底から嬉しかったのだろう。

誰にも見せたことのない俺の笑顔があった。

「お前、笑えたんだな。」

ふと気が付いた。

嘆崎はすごく嬉しそうな顔をしていた。

初めて見た。

そして、少し経ってから自分が笑ってることに俺は恥ずかしさのあまりに顔を真っ赤に染めた。

「み、見るな!!!」

俺はそう言って顔を背けた。

嘆崎は笑いながら言った。

「香蓮は可愛いな。」

嘆崎は俺にそう言った。

俺は複雑な気持ちと嬉しさの気持ちが入り混じった気持ちをおさえた。

「そ、そんなこと俺に言うな。気持ち悪い。」

俺はムスツとした顔でそう言った。

そして、嘆崎がまた笑った。

そして、その夜は一緒にベツトで一緒に眠りについた。

いろんな話を子守唄代わりに話を聞きながら眠りについた。

嘆崎の小さい頃の話。

嘆崎の小学生の頃の話。

嘆崎の中学生の頃の話。

嘆崎の高校生の頃の話。

嘆崎の大学生の頃の話。

嘆崎の警察学校に入った頃の話。

たくさんの嘆崎を知れた。

すごく嬉しかった。

聞こえてるかな？もう一人の自分に。

嘆崎を知れたのは私達なんだってこと。

本当はね。

俺はずっと好きだったんだよ？もう一人の俺のことが。

今気づいた。

ごめんな。

俺は泣きながら心の中で謝った。

・
・
・
・
・

いつまでも、ここにいてくれると思ってた。

お願いだから。

行かないで！！！！

・
・
・
・
・

次に、続く…

二重人格4（前書き）

いよいよ、最終話なので、最後まで読んで欲しいです。
もう一回言っときますが、ヒイクションです…。

二重人格 4

牢屋に入ってから五ヶ月が過ぎた。

もう生活にも大分慣れた。

でもまだ。

俺の中のもう一人の自分は暗闇に身を包んだまま出てこない。

いつも呼んだ。

早く出てきてくれって。

いつまで待たせるんだ！って。

なのに、あいつは一言も返さない。

もし、ずっとあのままだったらと思うと震えが止まらなくなった。

どうしたらいいんだろう？

俺は一人で考えた。

誰にも言えるわけがない。

何故だ？って？

そんなの決まってる。

誰にもどうすることもできないからだ。

誰かに何かできるなら、そんなのもうとっくにやってる。

「はあー。」

俺は深くため息をついた。

牢屋の天井に届きそうなくらい高いところに小さい窓がある。

その窓から見える青空は、「今日も晴れてるよ」と教えてくれる。

小鳥のさえずりが耳に静かに響く。

未だに帰ってこないもう一人の自分の気持ちはどこでみつければいいのだろうか？

早く言いたい。

「もう、俺がいる意味はないから。」っていなくなりたい。

そのときだった。

「おい。香蓮。外に行くぞ。」

久しぶりに見た顔はどこか懐かしくて胸が切なくなった。

栞。

またその人の名前が頭にちらつく。

「わかった。」

俺は重い気持ちになりながら、ゆっくりと立って嘆崎の傍に行っ
た。

きつと、そんな顔をしていたからだろう。

「まだ、もう一人はいないのか？お前は裏のほうだろ？」

嘆崎は心配そう俺に尋ねてきた。

どうせ、何もできないくせに。

「もう一人がいないんじゃない。もう一人の心がないんだ。意識が
ないんだ。」

俺はだんだん腹が立ってきた。

偉そうなことを言うてるくせに俺ともう一人の自分の気持ちをわ
からない。

なんて鈍感なんだと俺は呆れた。

「つまり、姿形はあるのに、受け答えをしないってことか？」

眉間にしわを寄せ嘆崎が首をかしげた。

なんとなく愛くるしくて可愛いと思った。

こんな姿を見せることは中々ないのに。

「ああ、そうだ。」

俺は目を逸らしながらそうつぶやいた。

めんどくさい。

俺が恋愛をすることが考えもしなかったことだ。

こづいうときにどうしたらいいかわからない。

「そうか。でも、どうやってたらその心は戻るんだろうな？」

俺と嘆崎は歩きながらそんな話をしていた。

歩幅をあわせてくれる嘆崎はやっぱり大人なんだなと俺を実感させた。

いつも、そうだったのかもしれない。

俺が本当は嘆崎の傍にいたいってときに必ず、傍にいてくれと言ってくる。

俺が不安なときは話をきいてくれる。

ああ、そうだったんだ。

何で気づかなかったんだろう。

いつも、影に優しさがあったのかもしれない。

ごめん。

俺は心の中で何回もつぶやいた。

本当は声に出して言いたいけど。

でも、出そうとしたときに喉で引っかかる。

言ったら何かが壊れそうで怖い。

頑張って作ってきた壁が全部壊れてしまつような気がした。

・
・
・
・

ゆっくり歩いた先には、大きく風が吹く風車小屋だった。

「じじは…」

俺は啞然とした。

鮮やかに緑色をした草花達が楽しそうに揺れていた。

俺の肺に綺麗な空気が流れ込んできたのがわかった。

「いいだろう。ここさ、俺が小さい頃によく来たんだ。つまんなかったり、悩んだりしてたときに、よくここにきたんだよ。いいだろっ…じじ。」

嘆崎は満面の笑みで俺にそう言ってきた。

俺は心が温かくなったのを感じた。

「うん。」

俺はすごく感動した。

生まれて初めてこんな綺麗なところを見たような気がした。

体に当たる風が生暖かくて、生きてるって感じさせてくれた。

「まだ、栞っていう人のことが好き？」

俺は尋ねた。

今なら少しずつ話していけるかもしれない。

「うん。今は思い出かな。でも、今逢えるなら。逢いたいかな。ちゃんと話せなかったから。」

そのときだった。

俺の耳にも響いた。

「賢治。」

綺麗な透き通るような声。

ふんわりと花の香りが漂ったとき。

目の前に現れた。

「賢治、久しぶり。」

やんわりと目じりを下げて笑った顔がとても綺麗だった。

この人って。

嘆崎は驚いた顔で一言つぶやいた。

「栞。」

目からこぼれる涙を拭いながら嘆崎は話し始めた。

「ごめんな。あのときにお前を守れなくて。守るって約束したのに。本当にごめん。」

嘆崎は泣きながら深く頭を下げた。

そんな悲しそうな嘆崎を栞さんは一目見て言った。

「賢治。私は賢治にいろんなことで守られてきたわ。だから、今回の件はあなたが謝ることじゃないの。ただ、気になることが一つあるのよ。だから、まだ、ここにいるの。きいてもいいかしら？」

栞さんは優しく微笑みそう言った。

柔らかそうな白い肌はまるで雪のよう。

とても、あたたかい。

そして、寂しい。

「なんだ？」

嘆崎は下げていた頭をゆっくり上げてそう尋ねた。

栞さんは少し寂しそうに聞いてきた。

「賢治の横にいる人は誰？」

栞さんは小さく首を傾げた。

光を灯し温かく見つめる瞳。

「この人は二重人格とのことで刑務所に入っている夕月 香蓮だ。」

嘆崎は寂しそうな顔をして、そう言った。

俺は軽くお辞儀をした。

「香蓮さん。とてもいい名前ね。ちょっと、耳を貸してくれないかしら。」

栞さんはとても温かい笑顔で俺のことを手招きをした。

俺はその指示に従った。

栞さんは俺の耳元で小声で話してくれた。

「あなた、賢治が好きでしょ？」

栞さんにそんなことを言われたから、俺は体を思いっきり反応させてしまった。

「そ、そんなことはないですよ。」

声が裏返りそうになった。

そんな俺を栞さんは笑ってコシヨコシヨ話で言ってくれた。

俺はその栞さんの話でびっくりした。

そして、大きな自信を持てた。

「そのことが言いたかったの。この話をあなたの心に置いて。そうすれば、何も失うことはないから。これで私は安心して、成仏できるわ。それじゃあね。賢治も元気でいてね。」

ばあー…

俺達にそう言い残して栞さんは行ってしまった。

金の光が俺達を包んだ。

「栞はなんて言ったんだ？」

嘆崎は俺に尋ねてきた。

でも、俺は。

「内緒。」

そう言っ てまた歩きだした。

そのときだった。

意識が異空間に戻された。

「ああー疲れた。やっと、お出ましか。」

俺の目の前には久しぶりに見る瞳に光を灯したもう一人の自分だった。

「ずっと、ごめんね。迷惑をかけて。でも、やっと、戻れた。」

優しく微笑む自分の顔が美しいと思ったのは俺の性格じゃないから。

「栞さんの言葉が聞こえたんだな。じゃあ、俺の出番はこれで終わり。それじゃあな。あばよ。」

消えようとした、そのときだった。

ギョツ!!

いきなり手を掴まれた。

初めてもう一人の自分に触れた。

「だめ。消えちゃ。私の心と、あなたの心は一緒なんだよ。だから、思っで。想像して？気持ち半分にしてくっつけるの。」

そう言っでもう一人の自分が俺の両手を握り、額をくっつけた。

そのときだった。

温かい風が俺ともう一人の自分を包み込んだ。

心から体まで全部温かい風が染み込んだ。

ああ、もう迷わなくていいんだ。

もう、泣かなくてもいいんだ。

目を開いた。

私と俺。

でも、もう私。

「嘆崎さん。」

私は嘆崎さんに微笑んだ。

久しぶりの笑顔は顔の筋肉が引きつりそうになった。

でも、嘆崎さんは驚きもせずと言っでくれた。

「おかえり。待ってたよ。」

優しい笑顔。

それは、きつと梨さんには見せたことがないだろう。

何故わかるか？って？

わかるよ。

好きだから。

嘆崎さんから伝わってくる。

嘆崎さんは私の手に自分の手を絡める。

淡い綺麗な空気。

近づく私と嘆崎さんの距離。

どんどん加速していく鼓動。

でも、温かい。

いつの間にか二人の距離は無くなっていた。

温かい嘆崎さんの腕の中。

ずっと、求めてきた。

好きです。

心でそう言った。

ギュッ

あ、返事が返ってきた。

「好きだよ。」

嘆崎さんの声で、ぬくもりで伝わってきた。

・
・
・
・

エピソード

「ねえ、賢治。どうして、私は死刑にならなかったの？」

新聞を広げる賢治に私は首を傾げながら尋ねた。

私は二十歳。

そして、今同居している賢治はもう三十五歳。

「ん？内緒。」

新聞に夢中になりながらそう言って教えてくれない賢治。

でも、私は気にしなかった。

「栞さんがあのときなんて言ったか、教えてあげようか？」

私は少し笑ってそう言った。

賢治は新聞を下げながら驚いた顔をした。

賢治が驚くのも無理は無い。

この栞という名前を出したのはあの亡くなってしまったはずの栞さんを見たとき以来だったからだ。

「あのときに栞さんはね。」「これからはあなたが賢治を支えていくのよ。何年も、これからずっと。あなたと賢治は赤い糸で繋がってるから。」「って、言ったのよ。」「

私は笑ってそう告げた。

そのときだった。

「あはは、そんなこと、俺にはわかってたよ。本当は夜に渡そうと思ってたんだけど……はい。」「

そう言って紺色の毛皮のケースに赤いリボンが結んである四角い箱を私の目の前に置いた。

私は笑って、その箱を開けた。

綺麗に輝くダイヤ。

私は大事に箱から出して、左手の薬指にはめた。

「結婚しよう。」

賢治が私を真っ直ぐに見つめて言った。

私は微笑んだ。

「当たり前じゃない。なんのためにここに私はいるのよ。」

強気な私は、もう一人いた自分。

でも、今は一人の自分。

賢治がいてくれなかったら、私はどうなっていたのだろう。

私は目の前に座っている賢治を見つめながら考えていた。

そして、お湯が沸騰したのを聞いてキッチンに急ぎ足をした。

これからは、もっともっと、いい思い出を…

あなたと一緒に……

終わり…

二重人格4（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7637h/>

二重人格

2011年1月9日14時32分発行